

共同研究の概要と経過

研究概要

子どもをめぐるさまざまな事件がつきからつきへとマスコミを賑わしている。その多くは従来の子ども観からは予想だにできなかった事件である。なかには殺人の被害者・加害者になるというとりかえしのつかない結末を迎えた悲劇も少なくない。現代社会の病いを象徴するものと片付けるには深刻である。こうした否が上にも、子どもへの関心が高まっているとき、子どもをめぐる学問研究の状況は旧態依然とした安定の域を脱するまでには至っていない。

この共同研究の出発には、いささかなりとも叙上の現状認識があったといつてよい。見えなくなった子ども、見えて来なくなった子どもにアプローチするためには、旧来の守備範囲では無理である。種々多彩に噴出する子どものエネルギーの総体をつかむためには、多様な分野からの学際的共同研究が不可欠である。

子ども史に近いところにあるとされたのは教育学、教育史の分野であ

る。しかし、学校教育の制度史の枠が優先し、学習者としての子どもの実態に遠い。まして、学校外の子どものあり方については十分な捕捉に至っていない。

高橋 敏

歴史学においても、民衆史の流れはあるが、具体的に子どもはどうか、ということになると、戸主としての男子の歴史が一般化し子どもの実像は見えて来ないのである。むしろ、民俗学、文化人類学、心理学等の研究の方に子どもが姿を現している。しかし、これとても、牧歌的「童」と間引き・子殺しの「闇」のイメージが交錯する、実像とは縁遠いものとなった。本来は子ども史の中核とならなければならなかった教育学や歴史学への批判はそれなりに受けとめることとし、目下子どもに注目し、鋭い問題意識をもって成果を挙げている関連諸科学に学ぶことである。

そのためには、まずは相互交流を図ることである。歴博の共同研究の趣旨とも一致する。もとより、共同研究を通して日本子ども史の基本的構成をイメージするところまでは到達しなければならぬかもしれないが、ここでは個々の関連諸科学のオリジナルを大切にしながら、学際研

究の一步を踏み出すことに意義を求めた。この共同研究の表題を「日本子ども史の基礎的研究」とした所以である。

研究経過

こうした趣旨を共有した館内の福田アジオ、岩本通弥、高橋敏が事務局となり、外部の研究者の協力を要請することになった。

歴博の共同研究は期間三カ年、各自が公務をもち、活動空間を異にする。また、予算上の制約もある。こうした事情を理解してもらい、三年後に総合的成果を挙げることは困難であろうが、各自のオリジナルを發揮していただき、相互の刺激的交流になるのではないかと共同研究員になることをお願いしたのである。

こうして、平成元年四月次のような研究スタッフができたのである。

- 太田 素子 郡山女子大 近世史における子ども史研究
- 梅村 佳代 暁学園短期大学 近世史における子ども史研究
- 保立 道久 東京大学史料編纂所 中世史における子ども史研究
- 箕浦 康子 岡山大学文学部 文化人類学からみた子ども史
- 山田 敏子 東洋大学付属牛久高等学校 口承文芸からみた子ども史
- 本田 和子 お茶水女子大学家政学部 児童学からみた子ども史
- 寺本 潔 愛知教育大学第一部 人文地理学からみた子ども史
- 高橋 敏 歴史研究部 総括 近代史における子ども史研究
- 福田アジオ 民俗研究部 村落社会における子ども史

岩本 通弥 民俗研究部 都市社会における子ども史

歴史学、教育学、民俗学、文化人類学、地理学、心理学等の関連諸科学を包括する学際的体制が一応は組織されることになった。

そして、各自がそれまであまり接したことのない研究者とそのオリジナルにとまどいながら、年三回ぐらい子どもをめぐる何かが得られるのではないかと、と草深い佐倉市の歴博に集まることになった。年度一回は相互の視点や方法を実地に交流させることを目的に調査地を設定し、フィールドワークを行うことにした。

三年次にわたった研究会、共同調査は次のようであった。

初年度である平成元年度においては、以下の四回の研究会を開催した。

第一回（一九八九・七・十四・歴博第二会議室にて）

研究発表 高橋 敏「近世村落の子ども―産泰信仰をめぐる―」

協 議 研究会開催に際しての基本方針等

第二回（一九八九・十・二十八、二十九・名古屋市名龍にて）

研究発表 太田素子「近世農村社会における少子化と子育て意識の

変容に関する心性史的研究」

梅村佳代「幕末の民衆と文化―伊勢国の寺子屋の分析を

中心に―」

保立道久「成女式の年齢としての十二、三歳」

箕浦康子「人の成長と文化―一つの理論的枠組み―」

共同調査 『桑柏日記』と市内関係地の実見（三重県桑名市及び市

立図書館）

第三回（一九八九・十二・九・歴博第二会議室にて）

研究発表 山田巖子「異常児誕生の世間話」

岩本通弥「親子心中論の二つの展望」

寺本 潔「奥三河山間地域における子供文化の変容―三

世代遊び地図をもとにして―」

第四回（一九九〇・二・十・国立教育会館五〇五号室）

研究発表 福田アジオ「子どもの民俗と民俗学」

本田和子「子どもの文化史的研究―子とろ子とろ考―」

協議 次年度の研究計画

二年度である平成二年度においては、以下の四回の研究会を開催した。

第一回（一九九〇・五・二十五・歴博第二会議室にて）

研究発表 特別講師 塚本学（歴史研究部）「幕末期の一少年」

特別講師 中内敏夫（一橋大）「労働者家族の行う教育

からみた子ども像」

第二回（一九九〇・十・二十六～二十七・新潟県柏崎市柏崎サンシャ

インホテルにて）

研究発表 太田素子「子どもの通過儀礼」

梅村佳代「近世奉公人形成と教育」

共同調査 『桑柏日記』と市内関係地の実見（柏崎市桑名藩陣屋関

係および黒船館）

第三回（一九九〇・十二・七・歴博第二会議室にて）

研究発表 山田巖子「他界へ帰る子ども」

高橋 敏「村の読み書きと子ども」

本田和子「子どもの文化史的研究」

第四回（一九九一・三・二十四・歴博第二会議室にて）

研究発表 岩本通弥「韓国の子どもたちと同伴自殺」

寺本 潔「子どものプリミティブな環境知覚と地図につ

いて」

保立道久「三年寝太郎の原像」

協議 次年度の研究計画

平成三年度においては、以下の三回の研究会を開催した。

第一回（一九九一・六・二十九・歴博第二会議室にて）

研究発表 福田アジオ「男子は父に、女子は母に」

本田和子「江戸期の出産をめぐる」

第二回（一九九一・十・二十五～二十七・会津若松市及び福島県立博

物館）

研究発表 太田素子「墮胎の心性史的研究」

岩本通弥「捨て児の日韓比較」

特別講師 菊池健策「犬供養と産神信仰」

共同調査 会津若松市内

第三回（一九九二・三・二十七・歴博第二会議室）

研究発表 高橋 敏「子どもから大人へのフォークロア」

梅村佳代「近世志摩国の寺子屋」

寺本 潔「アメリカの子どもの遊びと文化」

協議 研究のまとめ・研究報告書の編集と刊行について

一年次は各自の自己の研究紹介をかねて専門分野からの発表を中心に行った。また、共同調査として近世の子ども関係資料『桑柏日記』の舞台となった桑名市域を实地見分した。

二年次は、冒頭に塚本学氏、中内敏夫氏を招請して歴史学・教育学からの最新の研究成果を発表していただいた。つづいて、一年次を受けての共同研究員の発表がもたらされた。討議、そして研究会終了後の懇談と相互の刺激に富んだ交流が実現されたと思うが、それらをまとめてひとつの共有の成果物にするところまでには至らなかった。共同調査は前年の桑名につづき、もうひとつの舞台越後柏崎をフィールドに行われた。最終年度の三年次はまとめの年である。にもかかわらず、事務局の体制が整わず、二年次の延長に終始してしまった。それでも、熱心な外部の共同研究員の精力的発表と意欲溢れる質疑に励まされて研究会は維持された。

四年次には、三年間の共同研究の成果を研究報告書にまとめる仕事がおこなわれた。漸く曲がりなりにも平成五年三月全員の原稿が集まり、刊行の途が開かれた。前年九月末日のメ切を厳守された本田和子氏はじめ、年末までに続々と寄せられた各氏に対して御詫び申し上げたい。

この間、館内事務局の岩本通弥氏が二年次に東海大学に転出、また四年次福田アジオ氏も新潟大学に転任することになり、高橋一人が館内事務にあたることになった。

最後に館内事務局の数々の不手際にもかかわらず、常に研究会の運営

には協力を惜まず、いっぽう学問研究にあつては真執な態度を貫いていただいた館外の共同研究員の各位に深甚なる感謝の意を表したい。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)